

散歩だから、きまつた目あてはないが、

朝の散歩には、とき／＼、生みたて卵を買いに、養鶏所に立寄りされることがある。

その養鶏所の前の道路を隔てた空地に、当節の十二坪(?)式の小住宅がある。

垣のない小家の中は外から殆んどまるみえで、大した調度品もない簡単な家庭らしいが、芝生の小庭には、藤棚の下に砂場があり、ブランコがあり、その他いろいろの運動

遊具が散らばっている。

そのうえ、縁側には室内用スベリ台まで見える。

ピアノやオルガンは見えないが、男の子のらしい

晴やかな唱歌の音が屢々聞える。彼はいつもその小家の前に立ち止まつて、子ボンノウな若い両親の顔を想像する。丁度そのま向いに朝の富士が笑っているのである。

夕方の散歩は、妻君のお伴をすることも多い。商業街の赤や青のネオンサインの光が、書齋の目に賑やかだ。その一端に、懇意の八百屋がある。彼女がその夫君のために、季節々々のほつものを探しに立寄る行

朝の散歩 夕の散歩

倉橋 生

きつつけの店である。その若いおかみさんと彼女とは、いつも店さきで立話をする。その間、彼は店頭の色彩を眺めながら、おとなしく季節の俳句をヒネリながら待つてゐるのが慣例である。

ところが、ことしの初めその家庭に赤ん坊が生れたから、その立話の時間が長くなつた。そうして、その若いおかみさんの、離乳の話、睡眠の話、運動設備の話、すべ

て、忙しいあきないの間、育児苦心談に感心しては、それが帰り途、歩き、報告される。それがまた、翌朝に持ち越さ

れ、八百屋の若いおかみさんの、科学的母性の感嘆と、そのまる／＼日立つている赤ん坊のための祝福とで家中賑わう。その間、彼れおぢいちゃん、三人の孫達の顔を見わたしながら、にや／＼笑つてゐるのが慣例である。但し養鶏所の前の小家の向うの富士山のように高く君臨している訳ではない。

秋の保育應答研究会

一、九月二十日。十月十八日。十一月十五日。十二月二十日

(いづれも第三土曜日)(午後一時半)

一、会場。フレイベル館講堂。

来会随意。会費不要。

一、講師。倉橋惣三先生

フレイベル館内

保育応答研究会係

幼児の教育 第五卷 第十号

昭和二十七年十月二十日発行

東京中野区千光前町一〇

編集兼 倉橋 惣三

東京都文京区大塚町三十五

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都板橋区志村町五番地

印刷所 凸版印刷株式会社

東京都千代田区神田神保町二ノ四

発売所 株式会社 フレイベル館

振替東京一九六四〇番

○本誌御購読については注文申込その他はすべて發賣所フレイベル館宛に願います。